

ていた妻はハッと思い、近所の人と浅生の池に駆けた。そこには青々とした水面に死体がうつ伏せになって浮いていた。それは「ほうさん」の変り果てた姿であった。狐のうらみはその後二、三人の身内の人にも及んだという。

文化財保護に思うこと

田中九州男

森鷗外旧居に勤務するようになって三カ月がすぎた。秋から冬にかけての季節に、私は例年ない充実した期間を持った。そのひとつは、明治の文豪森鷗外がかつて起居したその部屋に、勤務することの緊張感であり、物書きのはしぐれとしての畏敬である。関心を持ち、ある人は明治のふん

このほかに、狐の皿とか、牧山の稲荷とかの話があるが、このほうは、狐を可愛がったので、狐が恩返しに、いろいろのものをくれた、という話である。

いきに心をなごませたのに、違いな。若いカップルが裏庭の縁先に腰をおろして、ふと見上げた青空のなかに、赤々と色づいた柿の実を見出して、思わず感嘆の声をあげたのを、ほほえましく聞いた。

これだけでも、文化財としての森鷗外旧居の、存在価値は十分にある、と自負しながら、こんな施設を保存してくれた市当局の熱意に、感謝の思いを新たにしたいことである。

美術工芸品のすばらしさはいまでもないが、なかで一枚の文書が私の目をひいた。「写経司解（しゃきょうしのげ）」がそれである。

写経生の待遇改善の要求を具体的に箇条書きにしたもので、天平十一年（七三九）ごろのものとして推定されている。毎月五日の休暇を与えること、食事を改善すること、連日机にむかって写経の仕事をしているので、胸が痛く脚がしびれるものが多いから、三日に一度は薬用の酒を支給することなど、六カ条にわたって要求事項が掲げられている。

これを見たとき、私は千二百数十年も昔のこととは思えず、現代の労使関係をみるような錯覚にとらわれた。墨書された一枚の紙に、私は年月を超えて人間の息吹きを感じたのである。

今日の課題だが、これも傍観して泣きごとを述べるのではなく、その調和に積極的に取り組み姿勢が必要ではなからうか。

こうして保護された文化財は、常時市民に開放されるべきだと思う。早い話が、指定文化財は社寺仏閣に多い。しかし、拝観することは容易ではない。もちろん、それは信託遺品であって、それを単なる美術品とみる軽率はずつしまねばならないのは当然である。

なによりも、文化的遺産に、私たちの祖先の叡智を知り、庶民のねがいを感ずることが、文化財保護の意義だと思ふからである。「北九州市の文化財を守る会」事務局・森鷗外旧居館長

編集後記

▼新年のおよろこびを申しあげます。すこやかな新年をお迎えになったことと存じます。いつそのご多幸を祈念いたします。

▼会報第五十号は戸畑支部の担当で、とくに福田安敏支部長のご尽力で発行されました。ご労苦に謝意を表します。

▼昭和五十九年度の、会費未納の会員の方は、出費多端の折、恐縮ですが、納入方をお願いいたします。

山門の前、左手に燈籠形の石幢が立っている。全高一、七五米、龕部六面には線彫りの地藏があり、所謂六地藏塔である。竿の部分をよく見ると左記の銘文が刻まれている。上部に月輪があり、その下に「為庚申供養結衆廿八口、千呺天正二年（一五七四）甲戌二月口念九日口白」とある。これは庚申供養塔として建てられたものである。庚申塔の守尊は、江戸末頃から、猿田彦大神や興王神の様な神道系のものが多いが、それ以前守尊は仏教系のものが多く、阿弥陀、地藏、不動、それから国東半島に多い青面金剛、など、又形から五輪塔、石幢などのものがある。石幢形のものを利用した作例はかなり珍しいと思われる。

この塔は、上部の宝珠以外、蓋から台座まで六角形をなし、全体に素朴な造りで、古式の特徴を表わしている。小倉北区の西安寺にある石幢は、かなりよく似ているが記銘年がない。それで大乗寺のものと比較すれば、大体の造立年が推定されると思う。この石幢形の庚申塔を見たことは私にとって良い収穫であった。

№ 50 60. 2. 1

北九州市の文化財を守る会

会報

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森鷗外旧居内
電話 (093) 531-1604
印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2-22
電話 (093) 511-1011

おわびと訂正

北九州市の文化財を守る会 八幡東支部長の交替について

会報第四十七号で、八幡東支部長を「熊井邦彦」としていますが、あやまりでしたので、おわび申上げて、次のように訂正します。

八幡東支部長 諸永光雄
(八幡東区槻田一―一―一二二)

文化財保護審議会委員名簿

会報第四十九号で、文化財保護審議会委員の名簿を記載しましたが、そのなかで山中英彦委員の氏名が脱落しておりました。おわび申しあげまして、再掲いたします。	担当分野	氏名	備考
	歴史	飯田久雄	再任
	民俗	能見安男	
	美術工芸	門司宣里	
	古		
	建築		
	動物		
	植物		
	地質		

(注・◎会長 ○副会長)

歴史 ◎米津三郎 再任
民俗 岡野信子
美術工芸 吉田美知子
古 錦織亮介
建築 福田安敏
動物 黒野肇
植物 山中英彦
地質 中村雄三
山岡誠
北条凱生

宇佐・大乗寺の石幢型庚申塔



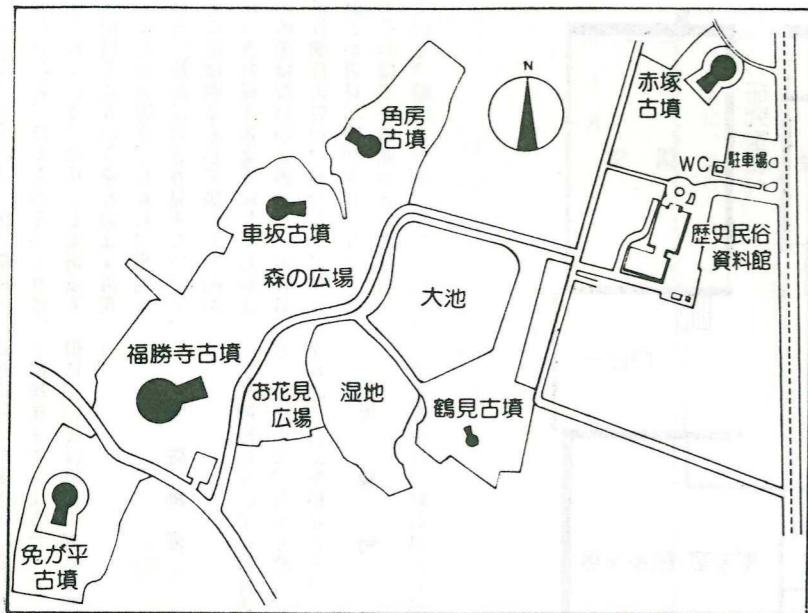
小倉北区木町・西安寺の石幢



宇佐・大乗寺の

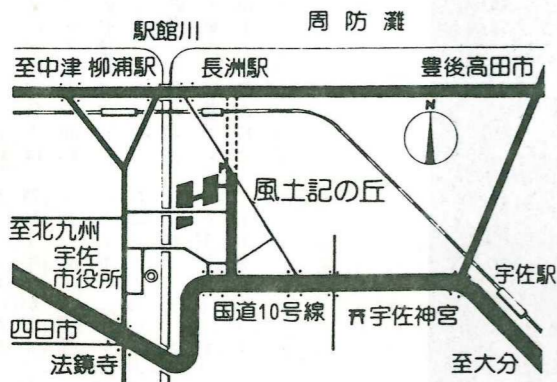
庚申塔

福田安敏



歴史民俗資料館

休館日 毎週月曜日と祝日の翌日
 入館時間 午前9:00～午後4:30(観覧は午後5時まで)
 観覧料 一般200円 高・大学生100円 小・中学生50円(常設展)
 交通 国道10号線御幡より北へ1.5km
 国鉄柳ヶ浦駅より4km
 国鉄長洲駅より3km
 国鉄宇佐駅より6km
 所在地 大分県宇佐市大字高森字京塚 〒872-01
 ☎09783-7-2100(代)



受付でお願いしていた館員の説明をとお出ると、あいにく、子供の文化財を守る会の発会式があり、寺の国東塔(模刻)がある。左手には岩戸今全員式場に行っているとのこと。終るまでの待時間もないのでそのまま参観することにした。部分的には説明したが、質疑応答のこともなかったので十分満足されたかどうか不安であった。入口からロビーに入るとちよっ

と薄暗い。正熊野石仏の大日如来の模刻がある。左手には岩戸寺の国東塔(模刻)がある。左の部屋に入ると最初のコーナーが「宇佐文化のあけぼの」原から古墳時代の発掘品が陳列されている。次が「宇佐の古代寺院」あり、そこで塑像が発見されたという。天福寺のことは割に不明であるが少い資料から天福寺は平安時代の建立と見られている。しか

付きを示している。ここでの庄巻は天福寺奥の院から発見された塑造の三尊像である。天福寺は四日市から南西六料の山手にある。奥の院は山の中腹の洞穴に建てられた所謂投入堂であり、そこで塑像が発見されたという。天福寺のことは割に不明であるが少い資料から天福寺は平安時代の建立と見られている。しか

し塑像 奈良期のものと見ているので、どこかの寺にあったものかも知れない。そのせんきくは別に、とにかくその豊かな姿態と衣文の線の流れが実によく、唐時代の影響下にあった奈良期の特徴をよく保持している。(図4)

九州では塑造のものは観世音寺の小さな残欠しかなく、こんな優品がここにあったことは奈良との交流の深さをここでも示していると云える。中尊はほとんど崩壊に近い。次のコーナー「六郷満山の文化」で長安寺の大郎天(模刻)宇佐神宮若宮にある神像など、中での資料館でもっとも金をかけたと思われるものに富貴寺の堂内を再現したものがある。実際より縮小してあるが、本内部の構造、本尊の

宇佐地方の諸寺をたずねて

福田安敏



東光寺の五百羅漢

昭和五十九年五月二十日(朝)八時に若松区役所前を出発、この日、口や福岡方面に行くという団体がおだやかな、快晴にめぐまれたハイク日和であった。区役所前には

第28回バスによる文化財めぐり
 宇佐地方の諸寺をたずねて
 福田安敏
 昭和五十九年五月二十日(朝)八時に若松区役所前を出発、この日、口や福岡方面に行くという団体がおだやかな、快晴にめぐまれたハイク日和であった。区役所前には

らの見学に参加するのだったが、先約してしまっていたので、残念がられた。最近見学の参加者が減少する傾向があるので、別の稿でこれについて提言したい。小倉駅北口で、ここからの参加者が乗車、総員三十一名、一路十号線を南下した。この一行については宇佐市教育委員会の文化財調査員、小倉正吾氏に資料を送っていただくなど色々とお世話をして下さり、暇が出来たら案内役をしてもよいとの話であったが、資料館や寺の方に、解説の件をお願いする手紙をそれぞれに出していたので、ご好意だけを受けて、おことわりをした。中津の街をはずれから日豊線を横切って北側の平行する道に出て南下して行く。この道は十号線より対向車や信号が少く、割にのんびり行けるので観光バスはよく利用するらしい。中津を出る国東めぐりの定期観光バスもこの道を利用して行く。これを行くと豊後高田市に直接出ることが出来る。柳ヶ浦駅附近から右折、線路を横切ると間もなく東光寺に出る。

東光寺

曹洞宗に属す。本耶馬溪町の羅漢寺の末寺と云われるが開基などは今の所不明である。本堂右裏手

歴史民俗資料館

国道十号線の方に向い、駅館川を渡るとすぐに資料館の駐車場に着く。何だか裏側から入った感

四、上記展示のほか文化講座、オリエンテーション等を行い、学校教育、社会教育に資する。」とある。

に、少し前斜面になった場所に五百羅漢がぎっしりと並べられている。実際には五百四十数体あるという。嘉永元年(一八四八)当寺十五世の玉峰道林和尚が、疫病退治と庶民の浄土安樂を願って日出の石工覚兵衛に刻ませ、明治四年に完工させたものと言われている。かなりプリミティブな作柄であるだけに興味をわかせる作品群である。

又この左裏手に十六羅漢と仏足石がある。年代はさほど古いとは思えないが、作品がまともで前作品ほど面白味はない。仏足石はかなり磨滅して、宝輪などの文様もはっきりしないが、日本の作例が少いだけに貴重なものがある。

この館が出来るときの趣意、目的及機能を簡単に紹介すると、「宇佐地方の文化財、国東半島の仏跡、石造美術、民俗文化、又大分県下の文化財等の保護、科学的な調査、研究をすすめる、その成果の発表、修理整備等、又之を県内外の人々に公開してゆく。このため当面の活動として、一、宇佐、国東を中心とする県下の史跡、文化財の調査、研究を進めその成果をもとにこれら文化財の保護にあたる。二、大分県を代表する歴史民俗資料館として県下の文化財の収集、保管、修理にあたる。三、調査研究成果と収集された文化財、さらには周辺の豊富な史跡等をもとにして、教育的な配慮の下に展示、公開し、県内外の人々に供する。

阿弥陀像、背後の又、柱、欄間に描かれた画、ほんものそっくりに作られている。薄暗くしてあるもの現場のふんいきをそのまま再現するためと思う。しかし、現場ではその絵がはっきり見えないので、ここでは明るくして描かれた面がはっきり見えるようにした方がよいのではないかと思った。最後は民族関係の資料、鬼会などに使う面とか道具が陳列され、又ビデオでその様子を時間をおいて映写している。館内を一巡、紹介したが、

宇佐神宮

宇佐神宮については参拝された方も多いため、説明を略し、中食をかねて自由解散にした。

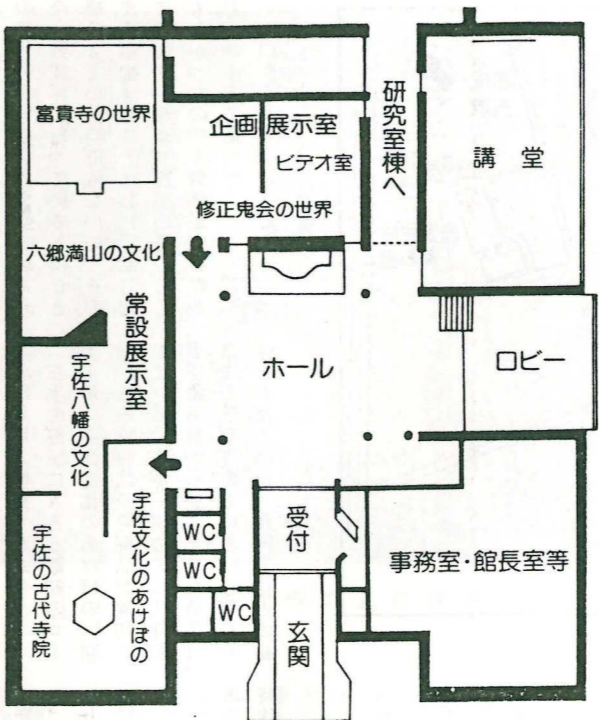
大乘寺

中食後集合、駐車場から国道十

号線をはさんで直ぐ斜向うの大乘寺に向う。住職は在宅され、本堂の諸仏についてくわしく説明を受けることが出来た。この寺は元弘二年(一一三三)宇佐神宮宮司到津公連によって、西大寺道密上人を開山とし、後醍醐天皇の勅願寺として創建されたと伝える。

しかし安置されている仏像はそれより古い平安期の作であるので、その伝来が不明だと云われていた。「大宰管内誌」に「大乘寺も初めは江島村に在しと云、今も江島村

に見える。四天王四軀(県重) これ等の像は日光、月光、より少し小さく、平安期の作品であるが、いずれも作ゆきがややおとる。特に下半身が弱く、力強さが感ぜられない。(県重) その他十二天の屏風などあり、住職のくわしい説明で参加者も満足の様子であった。三時頃出発、車の混雑にも会わず、五時すぎ北九州に帰着することが出来た。



天福寺・塑造脇待菩薩

歴史民俗資料館内部見取図

安川敬一郎氏は明治・大正時代の北九州の大実業家であり、また現九州工大の創設者としてその名を知らない人はいない。

安川敬一郎氏のこと

安田 富美子

安川敬一郎氏は明治・大正時代の北九州の大実業家であり、また現九州工大の創設者としてその名を知らない人はいない。

文久生れの祖父がある時、道で安川さんに出会い頭を下げたところ、安川さんも帽子にちよっと手をかけて会釈を返してくれたそうで、それを恐縮もったいながって話していたが、安川さんに関しての個人的な話はこれがたった一つであつた。

最近、この雲上人安川邸に出入りしたという人に出会って思いがけず二、三の話をきいた。大正四年生れの今年七十歳。楠義一さんで、両家に父親の時代から廃業する昭和二十年まで牛乳で用達を勤めた人である。

「私の父は若松の修多羅に牧場を持って牛乳屋をしていた。安川・松本両家が戸畑に引越して来られても配達のご用を勤めていた。そうだが、私が二歳の正五年に現在の戸畑区東大谷一丁目(当時の福柳木)の丘陵地に牧場を移した。父が死んでから私が引き継いだのだが、この土地も安川さんが父のために用意して下さったのだらうで、父はそれこそ身も心もなげうって奉仕していた。当時は搾ることから瓶に詰める

文化財めぐりのコースと参加人員

最近、バスハイクによる文化財めぐりの参加者が減少する傾向にあるので、これについて理事が総会で検討されることを提言します。

一、減少の原因

二、歯止めをかけるにはどうしたらよいか、など。

☆ 戸畑支部

参加料 三、八〇〇円

参加人員 三十九名

◇第27回(昭和58年11月27日)

コース 秋月城跡一めぐね橋一普門院一円清寺一小石原焼窯元

参加料 三、五〇〇円

参加人員 二十二名 (編集部)

城跡

参加料 三、八〇〇円

参加人員 三十七名

◇第28回(昭和59年5月20日)

コース 東光寺一歴史民俗資料館一宇佐神宮一大乘寺

参加料 三、三〇〇円

参加人員 三十一名

◇第29回(昭和59年10月21日)

コース 建武の板碑一岡森堰一諸九尼墓一空也堂一石住梵宇曼陀羅碑一不動院一大家古墳一鎮国寺一高倉神社一龍昌寺

参加料 三、五〇〇円

参加人員 二十二名 (編集部)

聞き書き

もう一つ強く印象に残っている

のは自動車に乗せてもらったことである。大正時代は自動車を見たことがないという人もたくさんあったが戸畑は安川さんのおかげで見た人も多かったろう。二台あり自家用が7号明治紡績会社用が11号であった。ピカピカと黒光りしていた。庭先に止めてある時よく顔を写して楽しんでたものだが、ある時同級生だった松本よし子さんが「乗りたい」と言うとき「乗りたい」と言うときすぐ運転手に言いつけて私を車に乗せてくれた。まさか本当に自動車に乗せてもらえようなどと思ってもよらなかった。の夢のようだった。前の道を走って一歩行きの道路口まで往復したが、帰って父に話すと大目玉だった。今思えば牛乳屋風情をあのよう上下の隔てなく扱ってくれたのありがたく思うとともにこれが両家の方々の持っておられる誠実な心の表われだろうと思われ

戸畑の萬葉歌碑について

(故)塚本智・記
福田安敏・補記

昨年の春ごろだったか、一市民から、いま夜宮公園にある万葉歌碑が位置もどこにあるかも分らないような場所だし、また経緯からいっても戸畑渡場附近がよいので、字も読みづらい。一昨年、RKB移しかえるよう市に申し入れてほ

小学校は全校生徒百二十人くらい。私の組は二十三名で松本七郎氏は私より三級上だった。校長は福井愛吉先生、何事にもきびしい方で年中何回かある遠足も一回を除いては梅干辨当。男児はワラジ、女児はゾウリ、必らず検査があり守れない者は取り替えに帰らされる。質実剛健、鍛錬の教育だったと思う。児童は安川・松本両家、明専教職員、明治紡績、明治鉱業関係職員の子弟で高等な知識人を父兄にもつ子供達であったが、その中に私のような者も二、三加わっていたのである。にもかかわらずあの時代に何の劣等感も感ぜず伸びのびと過ごせたということは、何と言っても安川・松本両家の一人を大切にするという思想が学校にも満ちていたからだろう。楠さんは明るく話してくれた。

字が写るだろうかと大分苦心して書いた。歌碑は、「ほととぎす飛幡のうらに しばしば君を見むよしもがも」と戸畑の浦の歌である。この歌碑は、元戸畑区役所横の公会堂の前庭、左側にあったが、この公会堂が取りこわされ、今の環境衛生試験所に建て変るとき、工事の邪魔になるといわれて、その時夜宮公園に移転されたものである。一応戸畑郷土会に了解を求められたことはあったが、郷土会としては渡場の公園に移してほしいと強く申入れた。しかし意に反し、夜宮公園に移されてしまった。当時夜宮公園の整備工事が始まっていて、そのどきどきに移転費も含めれば簡単だと理由があったと思わざるを得ない。渡場にすれば別個に予算を組んだり、また認可にも暇があるなどの理由も含めてのことだったろう。一市民からの話を聞いて間もなく広報課の方が来宅、あれは当時の文連から「夜宮がよいとの申入れがあったので」と云われた。当時の文連会長は故人だし、今の市財政では移転費も無理だし、郷土会としては今さら云々しても始まらないので、将来出来る時に移転してほしいが、さしあたり歌碑のある場所の道順などの標識板を立てることだけを

明治末期の戸畑 (故)伊崎吉兵衛
明治末期、私たちが子供のころ、戸畑で町は戸畑、中原天籟寺、鶴ヶ谷、中島と大別されていた。そのころの戸畑の住居地域はだいたい明治町一丁目以西鹿兒島本線以北の範囲であった。そのなかでも、元の戸畑郵便局(本局)あたりから共立病院の周辺は「いしむら」と呼ばれ、玉砂利を採った跡が浅い池地のようにくぼんでいて、人家はほとんどなかった。また、通り町一、二丁目西裏から天籟寺川筋までは築港の浜(今の銀座一帯)といわれ、草ぼうぼうの五万坪ほどの原っぱは、西北の一隅に二三の鉄工所があっただけで、人家はまるでなかった。この狭い戸畑に、はまがた(浜方)、まちがた(町方)きたぶた(北牟田)、そらがた(空方)、ほりがた(堀方)、いしむら(石原)の小字があった。浜方は若松への渡船場から船だまりにわたって海にのぞみ、通町一丁目と栄町筋で、半農半漁の家と専業漁家との聚落であった。前に記した小字はみな農業を営んでいた。

飛幡は筑前風土記には、鳥旗とあり、後戸畑の字を用ひて今に到れり
昭和十一年十月一日 戸畑教育会報
楠本さんは二枚の表と裏二枚の書と設計図を携えて、福岡在住の石工、広田徳衛門さん(元首相の弘毅氏の実兄)にその碑の建立を依頼された。七百年で石から建立までの諸費用を合算すると到底不

戸畑の伝説

沼の坂の狐

塚本 智

故塚本智氏が書き残した「戸畑の伝説」に狐の話が二、三ある。若松には火野葦平がとりあげたカップ伝説があるように、戸畑には狐の話が多い。塚本氏が書かれた話自体もおもしろいが、また戸畑の移り変わりを知らうえて貴重だと思われるので、ここにとりあげることにした。

沼の坂の狐(略述)

一名浅生の狐ともいわれる。今から四十年(昭三六年現在)位前までは昭和通りの楠田蒲団店附近から中本町三丁目及び日立金属

う道楽もなく、野良仕事の後で晩酌を一杯傾けるのが何よりの楽しみであった。
煙草は人一倍好きで、皮の煙草入を腰に差し、道端で人と話をする時などは、腰の煙草入から煙管をとり出してブカブカと一服吸い、大きな手の中に吸殻をブツと吹き出し、また詰めかえては手の中に吸殻の火が消えない間に吸付けていた。

きもしなかつた。子狐が殺されてから親狐は子を探して浅生の山や池はいうに及ばず、那道筋や水田も村里も探し求めて夜も昼もなき悲しんだ。親の一念は恐ろしいもので、つい子狐の皮を探し当てた。「ほうさん」はそのころから毎晩のように悪夢になやまされ、体からは玉のような生汗を流して苦んだ。

小無田杜宅あたり一帯を沼の坂といつて赤土のかなり急な坂道があり、坂を挟んで両側に人家が並んでいた。坂を登りつめると右側に松の木や背の高い雑木林があったが、昭和通りに電車が開通してから一変した。しかしこの辺の町を永く沼町と呼んでいた。さて話は今から八、九十年前のことである。この沼の坂を登りつめた松林の中に小さな稲荷を祀った祠があり、十戸ばかりの農家が、その中に「ほうさん」と呼ぶ農夫がいた。平常から神仏を信仰するでもなく、またこれとい

妻が差出す手拭で汗をふきながら妻に語った話はこうであった。「母狐が皮をはぎ取られた子狐をしっかりと抱きながら、ランランたる怒りの目を輝かせ「お前も子を殺されてどんな気がするか。せめて皮だけでも返せ」と云って今にも飛びつきそうである。その様相は言葉にいえぬ恐ろしさであった」と苦しい息をしながら語ったというのである。その後、妻が近所に話した言葉では「なんぼ子狐でも内の人があんまりむりこくな事をしちよるとやけ、どちみちよかことあるめいたい」とつぶやいていた。

「ほうさん」は郡道筋横の土手(今の労働会館の上附近)の上に細長い畠を持っていたが、畠続きの土手を開墾して無花果を植えたいと思い、時折妻にも相談していた。六月も終りごろになると田植えも済んで農家も一息入れる時期である。間もなく老若男女が楽しみにしている年一度の祇園祭も間近かになるので、その前に無花果畠の開墾しておこうと畠を肩にして家を出た。青々とした蓮根田や美しく植えられた水田は遠く天籟寺まで続き、これをとり巻くように牧山や豊前坊が長く連なり、目に映るものすべてが緑一色になっていた。土手に腰をおろし、煙草入を取り出してこの美しい眺めの中で一服吸いながら、赤く熟した無花果を籠に入れる事でも想像したであろう。煙草を吸い終ると元気がよく立上って笹藪の生茂った土手を黙々として一畝ずつ開墾していった。

はがれた皮は毎朝外に出して陽に干し、夕方は家に入れて、毎日根気よく行った。もちろん妻はそんなことに見む